

佐藤春夫が愛した「鹿六」のうなぎ



井戸水に数日間、泳がせて身を締めたるうなぎを、背開きにして、蒸さずに焼く。創業以来、継ぎ足してきたたれが絶妙にマッチ。

「蓋をあけると先づ香気が鼻を打ち」
随筆に寄せた地元名代の味わい

「さんま、さんま、
さんま苦いか塩っぱい
そが上に熱き涙をしたたらせて」

不憫な幼子らと囲む夕食風景

を、哀感あふれる詩にうたった「秋
刀魚の歌」で知られる作家、佐藤

春夫は、さんまをはじめ漁業が盛
んな熊野地方の新宮市に生まれ

た。医師だった父の影響で文学に
親しみ、中学卒業後に上京、小説

「田園の憂鬱」などを発表した。

あまりに有名な詩のせいでも、さ
んまのイメージが強いが、実は大
のうなぎ好きで1956年4月
発行の雑誌「あまカラ」（甘辛社）
に、「うなぎの話」という随筆を
寄せている。

「市に名代の鰻屋があつて、朱
塗りの浅い容器のなかに、底には
一面に山椒の若葉を敷いた上に蒲

焼を置いたのが、蓋をあけると先

づ香気が鼻を打ち（中略）、見た

眼にも美しくて食欲をそそった」
その鰻屋が、生家のほど近くにあ

る鹿六。4代目の浦中紀清さんは
「祖母に聞いた話では、座敷で一

日中横になつて、出版社からの電
話にも、『おらん、と言つとけ』と

とりあわなかつたそうです」と話
す。焼き方やたれ、お気に入りだ
うた座敷も当時のまま。アツアツの
身を一口頬張れば、「こいつは、う
まい」と舌鼓を打つ作家の声が今
にも聞こえてきそう。



東京都文京区にあった佐藤春夫の邸宅を1989年、移築。設計は同郷の建築家、西村伊作の弟、大石七分（しちぶん）。和洋折衷のスタイルで、飾り窓やサンルームなどの洒落た造りが目をひく。執筆時に使ったという小さな2畳の書斎には、めがねやライターなどの愛用品も展示されている。

佐藤春夫記念館
住所／新宮市新宮1
電話／0735-21-1755



鹿六(しかろく)
住所／新宮市元鍛冶町2丁目3-5
電話／0735-22-2035

